

第18回 日能研

文学コンクール

優秀賞

【創作文】タニシの楽しみ

関西大倉中学校・二年

森本 奏さん

作品に対する思い・感想

私は漫画を読むことが好きで、非日常的なことをよく妄想します。

創作文を書く時に題材が思いつかず、生き物係で水槽を洗っている時に妄想していたことを題材にしたところ、この賞をいただくことができました。まさか普段の妄想が誰かに評価されるとは思っていなかったので、驚きと喜びの気持ちでいっぱいです。アドバイスをくださった先生方、選んでくださった審査員の方々に感謝を伝えたいです。ありがとうございました。

夏休みも明けて、残暑見舞いが世を飛び交っている頃。俺がこの一年暇な生活から抜け出せる待ち望んでいた時がやってきた。

「キーンコーンカーンコーン」

3時間目終了の合図がした。昼休みが始まる。教室は好きな芸能人の話、ゲームの話、さらには戦隊ゴッコをしている奴ら。皆がいきいきと楽しそうにしている。そんな中、あの子は今日も頼りのないおさげをして1人、教室の隅で黙々と弁当を食べ進めている。会話をする相手がいないのはあの子ぐらいだろうか。俺だったらこんな状況に耐えられずに会話に入れてもらうか教室から抜け出していると思う。それに、あの子も「友達と喋って仲良く過ごしたい」、そんな顔をしている。ずっと見ているからあの子がどんな気持ちかはなんとなく分かる。なんたって俺はタニシだ。もう5年も前から、水槽の中からこの教室を見守っている。

実は俺には秘密が1つだけある。それは、1年に1度だけ苗字に”田”か、”西”が入っている人間(つまり俺は田西だ)と入れ替わることが出来るということだ。俺は初めてあの子を見た時に運命を感じた。よく分からないけど「ビビッ」とくるあの感じ。そうしたら案の定苗字が西島だった。

クラス替えで進級して来たあの日から、暇しのぎに水槽にやってきては、あのどこか物足りないようでなんの邪心も虚飾もないあの真っ直ぐな瞳に見つめられて、俺はその日を今か今かと待ち望んでいた。。

ああ、今日も見つめられて…ってえ！？グルグルと前後がわからないくらい目が回る。目が回って気持ち悪いはずなのに何故だか凄く心地よい。来た来た来た来た来た一来たっ！この感じ！俺は知っている。

目が覚めるとそこは保健室のベッド。今回はなんだかありがちな目覚めだ。下を向くとサラサラツツツの誰もが憧れるような長い髪が見えた。気持ちが昂ぶる。

「やった！やっと西島と入れ替わることができた！！」

高揚する気持ちを抑えて保健室の先生に早退する意思を伝え、なんとか家に帰ることに成功した。

「あんた、今日は早かったやん、お父さんも出張やから、今日は外食やでえー」と家に帰ると、独特のステップで小躍りしながらお母さんが迎えてくれた。意外にもあの子の母親はコテコテの関西弁で人懐っこい感じだ。あの母親の子供なら、あの子も実は、明るい性格なのかもしれない。

次の日、小鳥のさえずりで目が覚めた。いい目覚めだ。いつもは低い場所に2つに結われ

ていた髪を今日は高い位置に1つにまとめる。丸い眼鏡を外して、制服の第一ボタンを開ける。よし、完璧だ。俺の目的はなかなか勇気の出ないあの子の代わりに転機を作って楽しい学校生活を送ってもらおう。ただそれだけだ。ポニーテールを揺らして学校に向かう。前に同じクラスの女子3人組が歩いている。よし！チャンスだ！前の方に走って肩をポンと叩く。振り向いた瞬間にすかさず

「おっはよう！」

と、弾けた笑顔で挨拶する。3人は顔を見合わせながら驚きながらも一応

「おはよう...？」

と挨拶を返してくれた。

学校に着くと計画通り騒がれた。

「え、そっちの方が絶対可愛いよ〜」

とか

「イメチェン！？めっちゃいい感じじゃん！」

とクラスの女子に囲まれる。外見は俺のものではないけれど、褒められると嬉しくなる。そんな中、奴が

「前も可愛いかったけど、今の方が似合ってる！けど、皆にこの可愛さがバレたと思うとちょよっと悔しいな〜」

と何を考えているかよく分からないニヤついた顔で言ってきた。コイツは学年一番のモテ男の目黒だ。流石モテるだけあって、男の俺でもトキメいてしまいそうな言葉を、誰彼となく息を吐くように言ってくる。顔がいきなり赤くなった所をみると、どうやらあの子はコイツに惚れているらしい。

目黒は、一見ただの女たらしのようであるが、実はコイツが毎回頼まれて出来の悪い奴に付き合っ、男女分け隔てなく放課後に宿題を丁寧に教えてあげている事を俺は知っている。チャライ割に、男子から嫌われていないのは、これも大きな理由だろう。

1時間目、数学の授業が始まった。毎日水槽のガラスにへばりついて授業を聞いているので学力には自信がある。早速先生に当てられた。あの子なら隣の人ですら聞こえるか分からない声で呟くだろう。しかしここで俺は、

「えっ？拙者でござりまするか、先生殿？」

と1番後ろの席で後ろを振り向きながら、大声で掃除ロッカーに話しかけるという1年温め続けたボケで爆笑をかつさらった後に、しっかりと正しい答えを出した。先生とクラスメイトは、相当に驚いたようで、その後の授業中もチラチラと視線を感じたが、授業は特に問題なく進んだ。今あの子は水槽の中でどんな気持ちでいたのだろうか。少しだけ申し訳なくなる。

俺は休み時間も2、3時間目もふざけ倒して、クラスにも馴染み始めていた。しかし、3

時間目が終わった後、

「急にどうしちゃったの？体育の時なんか顔に当てられちゃったボールすごい顔して投げ返してたじゃん」

とニヤついた奴の声が聞こえる。

「すごい顔とはなんだ」

と言い返してやろうとした瞬間に「ビビッ」とするあの感じがした。どうやら入れ替わってから 24 時間が経ったみたいだ。目を開けると今まで見たことないような顔をした西島が目の前にいた。

「ねえ、君何やってくれてんの！？あんなふざけたことして今以上に変な空気になったらどうすんだよ！！唯一の学校に来る理由だった目黒君にだって絶対引かれたって...」

どうやら怒っているようだ。しかし、俺には怒る理由が分からない。だから俺は思いっきり親指を立てて

「安心しろ！家が近い 3 人組と仲良くなって昼飯を一緒に食べる約束をしている。それに、あの男は出来の悪い子を見ると誰にでも教えずにはいられない奴だ。君も勇気を振り絞り宿題を教えて貰うように頼むんだ」

とニカッと歯を見せて世界一の笑顔で言う。俺には歯はないが、その笑顔にあの子も最初は怒っていたが、最後には呆れた表情で、

「ずっと誰かとお昼ご飯を誰かと食べたいと思っていたから、その友達が出来たのはデカイ。だから許す。っていうか、いつかは変わりたいって思っていたからお礼を言うべきかもね。ありがと、カメムシ君」

「誰がカメムシやあ！」

俺は、あのお母さんの子で、こんな冗談をいえる子ならいつか自分で殻を破ることが出来たのかもしれないな...なんて考えていたらいつの間にか気を失っていた。

目を開くとそこは水の中だった。水中での息の仕方を思い出す。教室には誰もいない。どうやら既に放課後になったようだ。すると涙目の西島が教室に入ってきた。自分の席に座って、虚ろな目でモテ男の目黒の席を見つめている。思いを伝えてきたのだろうか。すると俺に話しかけてきた。

「私さ、宿題教えて貰った後に、あいつに付き合ってくださいって言ったら 2 人目で良いなら全然ええで一って言われた。何あいつマジで腹立つんだけど、そもそもさあ、あいつ関西出身じゃないのになんで関西弁喋ってくるわけ？」

とたまりにたまった愚痴を聞かされた。俺はモゾモゾと触角を動かすだけで、相槌を打つことすらできないので申し訳なくなっていたが、逆にそれが吐き出しやすくさせていたのならそれはそれで良かったと思う。少しすると、家の近い 3 人組の内の補習に引っかかっていた 1 人が

「もしかして1人！？一緒に帰ろ！」

と言われてあの子は帰っていった。その顔はとても幸せそうな顔をしていた。

それからあの子はたまに水槽に寄ってきては、最近あったことを話してくれる。あの子にとってはタニシと入れ替わったという、インフルにかかった時に見る夢かのようなことを真実と信じて話してくれるのはとても嬉しい。その内容は、友達が犬のフンを踏んで落ち込んでいるのをおちよくっていたら、鳥にフンを落とされたなどと言う、前のあの子からは想像できない内容だがすごく楽しそうな学校生活だ。前の物足りなそうな顔を見る事はなくなった。明るいあの子の笑顔見るたびに嬉しくなると同時にまた暇な水槽生活に戻って少し寂しさも感じる。

そんな暇な日には、メダカたちの会話を盗み聞きするのが一番だ。

「あんた私に思いを伝えるなんて百年早いねん、私の二匹目ならええでー」

そういえば、メダカって目高って書くけど、もしかして・・・